

牧師室から（2023.4.9）

イースターおめでとうございます。木々の芽はほころび、花が咲き出して新しい生命の息吹を感じる。様々な思い煩いをかなぐり捨てて再出発したいものである。

私はイースターという思い出すある小説の章句がある。それはゲーテが生涯をかけて書いた『ファウスト』第一部の「夜」の章である。生きるのに行き詰ったファウストは暁に毒杯を飲み、死の門出に赴こうとする。しかし杯を口にしたところで復活祭の鐘の音と天使の声が聞こえてきて、杯を遠ざけることができた。・・・(天使の合唱)「クリストはよみがえりましぬ。死すべきものに、歓びあれ、滅びをもたらず世襲の罪をになえるものに。」(ファウスト)「何という深い鐘のうなり、なんとという冴えた歌の音色、それが無理やりにおれの口から杯をひきはなすではないか。お前たち臙ろな鐘の音は、もう復活祭の序開きの時刻を告げるのか。お前たち合唱の群れは、むかしまだ暗い墓穴のほとりで、天使の口から唱えられて新約の基をかためた、あの慰め多い歌をうたうのか。」・・・(相良守峯訳)

かつて予備校に通っていた頃、昼に散歩して、四谷の外堀の小高い散歩道のベンチに座って、教会の鐘の音を聴きに行っていたことがある。基本的にお寺の鐘は単音だが、教会の鐘はポリフォニックである。いずれにしても鐘の音というのが人の心に響くものなのであろう。『寅さん』でも話の最後の方に、帝釈天の寺のゴーンという鐘が鳴ると一件落着となるものだ。

かなり前だが、その教会の鐘の音を巡って地域から騒音であるとの訴えが出たことがあると聞いている。もしお寺の鐘の音であれば、誰もそんなことは言わないであろう。今日（9日）は選挙があるが、事前の街頭演説や選挙カーのメガホンの方がずっとうるさいので、むしろそちらを問題としたほうがよいのではないかと私は思っている。

(鈴木淳一牧師)